

## 「主イエスの不在／とりなし主なるイエス」(ヨハネによる福音書17:1-11)

主イエスはご復活から40日後に天に昇られました。わたしたちは今、主の昇天後、弟子たちが約束の聖霊降臨を待ち望んでいる、そういう時を教会暦のなかで歩んでいます。主イエスの不在という現実には弟子たちは直面しています。この、「主イエスの不在」という状況、心境は、実はわたしたちクリスチャンにとっては非常に身近な「問題」ではないでしょうか。どんなに祈っても聞かれない、今助けてほしいのに主イエスは助けてくれない、そういう現実のなかで、わたしたちは「主イエスの不在」を感じ、不安になり、揺れます。今日の福音はそのような現実を生きるクリスチャンを力強く励まします。天に昇られた主イエスがとりなしてくださるから、あなたが弱くとも、不安でも、揺らいでも大丈夫だ、そう今日の福音はわたしたちに宣言し、励ましています。今日の福音書、少し混乱した方もおられるのではないのでしょうか。たとえば、物語の時系列では、ご受難はこれからであってまだ主イエスはこの世にいるにもかかわらず、「わたしはもはや、この世にはいません」と言うのです。他にも、「わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業をなし遂げて、地上でああなたの栄光を現しました」ともあります。これも十字架上で「なし遂げられた」と言われる、主イエスの言葉の先取りのようで、すでに主イエスが十字架によって栄光をお受けになったかのような言葉です。これはどういうことなのでしょう。これらの言葉の背景にある、ヨハネ福音書が記された当時の状況、そして著者の意図をみてみましょう。

ヨハネ福音書著者は、この福音書を歴史書として記したのではありません。歴史書であれば、先程の箇所も混乱を招くような文章にはせず、理路整然と、時間軸を正しく辿りながら物語を進めたはずですが、しかし、著者そうしませんでした。なぜなら、ヨハネ福音書は物語の形をとった一つの宣言だからです。ここに真実があるぞ、と宣言する書物。ことに、不安のなかで信仰の道を外れてしまいそうになっている人々に向けて、そう宣言している書物なのです。

ヨハネによる福音書が記されたのは、紀元後90～100年頃とされています。その少し前、紀元後70年、ローマの支配下にあったユダヤは、ついにローマへと闘いを挑みます。しかし、結果として彼らは破れ、民族のアイデンティティの根幹であった神殿を失ってしまいます。そこで、ファリサイ派を中心とした宗教指導者たちは、宗教的基盤を再興することで民族の再統合を目指し、それまで以上に律法主義的傾向を強めることになりました。そうすると、律法を軽んじたと断罪されたイエスを信じる人々への迫害は厳しくなります。こうして、ユダヤ教のなかでそれまではナザレ派と呼ばれていた人々、つまりのちにクリスチャンと呼ばれることになっていく人々は、ユダヤ教から独立した宗派を形成することを余儀なくされていきます。そういう過渡期にあって、クリスチャンは決断を迫られます。それは、困難な現実下でもイエスの生き方に従い続けるのか、それとも、その生き方を離れ、律法主義的色彩を強めるユダヤ教へ戻るのか、という決断です。前者を選ぶなら、ローマからユダヤ教に与えられていた様々な宗教的特権を失うことにもなり、迫害のみならず、生活もままならない非常に厳しい現実が待ち受けています。そういう困難な状況下で、クリスチャン共同体は異邦人世界・異教の地へとこれまで以上に展開していくようになります。しかし、そうすると何が起こるかと言えば、異教の地において教会内部に異端説が現れはじめてしまうのです。つまり、今度はクリスチャン共同体内部での分裂の危機が起こってきってしまうのです。こうして、当時のクリスチャン共同体は、内外からの危機に直面していました。多くの信仰者が迷い、葛藤し、苦しんだことでしょう。多くの人々が主イエスの道から離れたことでしょう。そして、その全てと言って良い人が、「主イエスの不在」という問題に直面したことでしょう。「ここに主イエスがいてくださったなら!」「主イエスがはやく再臨してくれれば!」と叫んだことでしょう。ヨハネ福音書は、その人々に向かって語るのです。主イエスは不在ではない。ヨハネ福音書と同じ著者が記したヨハネの手紙の言葉です。「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち命の言について。」このヨハネの手紙Iの冒頭の言葉が宣言するように、ヨハネによる福音書は、主イエスは不在なのではない、今も「目で見えて、手で触れることができる。今も主イエスと出会うことができる。主イエスは共にいる!」と「主イエスの不在」の問題に直面する人々を励ますのです。

しかし、どうしてその主イエスと出会うことができるか。それこそ、この二・三週間繰り返し申し上げているように、ヨハネ福音書が「初めに言があった」とはじまり、主イエスを「命の言」と

も記すように、み言葉を通してです。ヨハネ福音書は主イエスの死後数十年経って記されたものです。つまり、著者は直接主イエスとあったことなどない世代です。しかし著者は、み言葉を通して、み言葉との交わりのなかで、時を越えて、主イエスと出会ったのです。だからこそ、この福音は、主イエスとわたしはまことに出会った、ということを経験した事実として証しし、確信をもって語るのです。それゆえ、ヨハネ福音書が今日の福音書にあるように、「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」と語るとき、それはヨハネ福音書著者にとって、真実に起こった出来事であり、まことの励ましとして、真理として語るべき言葉であったのです。そして、その確信ゆえに、福音書はその救い主は今も我々と共におり、「その主イエスこそまことのぶどうの木なのだ」「主イエスこそ道であり、真理であり、命なのだ。そこから離れてはいけない」と信仰の危機にある人々を励ますのです。その確信と宣言は時空を超えた真理であり、時を超えたわたしたちにも届けられるものです。それゆえに、今日の福音のように、物語としての時系列を超えて、普遍的な真理としての「言葉」を、主イエスは語るのです。

主イエスは、不在ではないどころか、今なおわたしたちと共におられ、さらには、わたしたちのことをいつも神にとりなしてくださっています。主イエスは言われます。「彼らのためにお願いします。世のためではなく、わたしに与えてくださった人々のためにお願いします。彼らはあなたのものであるからです。わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。」ヨハネ福音書著者はここで、天上で力強くとりなしてくださっている主イエスの真実を明らかにしているのです。そして、「わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業をなし遂げて、地上であなたの栄光を現しました」と語る、十字架によってなし遂げられた、栄光をお受けになった、他にもないあの主イエスが、わたしたちのためにとりなしてくださっているのだ。だから、大丈夫だ。信じて歩もう、と確信をもって語り、励ましているのです。

「主イエスの不在」を感じ、葛藤し、揺れる、そういう弱い人間であっても、あなたがたは信じることができるし、その先には、主イエスと神が一体であるように、あなたがたもその交わりに加えられ一つにされる、なぜなら主が天上でとりなしてくださっているからだ、と今日の福音は語ります。だからこそ、今日の福音は、こうも述べます。「彼らはみ言葉を守りました。」「彼らは知っています。なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて、わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです。」これを読む時、「わたしはみ言葉を守ることも、主イエスをまことに信じ切ることもできていません。」という思いにさせられます。しかし、それを決めるのは、わたしたちではないのです。それを決めるのは神なのです。その神によってわたしたちはこうして今日も主イエスの名によって神の家族とされています。神の教会に連なるものとされています。これがわたしたちに起こっている真実です。わたしたちは確かに不信仰なものでありながらも、確かに今、ここにいる。わたしたちがふさわしい行いをしたからではありません。主イエスが、神と主イエスとの交わりにわたしたち一人ひとりが加えられるように、とりなしてくださっているからわたしたちはここにいるのです。ですから、わたしたちは弱くとも、強いのです。

先日昇天日を迎え、間もなく聖霊降臨日を迎えようとしているわたしたちは、教会の暦では主の昇天後の聖霊が未だ降っていない時を過ごしています。もちろん、わたしたちはすでに弟子たちに聖霊が降り、聖霊が働かれている今を生きているのですが、時として、わたしたちは「主イエスの不在」、という信仰の苦しみに直面します。今日の特禱で祈ったように、「わたしたちを助けのないものとしなさい！」と祈らずにはおられないときがあります。そういう信仰生活を省みるとき、しかし、そのようなときにこそ、主がわたしたちをとりなしてくださっている、主イエスが「彼らを守ってください」と、神に願ってくださっていることを憶えたいと思います。自らの命をかけ、わたしたちのために死んでくださった方がとりなしてくださっている。とりなし主なるイエスによって、神は必ずわたしたちを守り、導いてくださる。そのことを信じてまいりましょう。